

日蓮大聖人御書全集

すしゅんてんのうごしよ

崇峻天皇御書

さんしゅざいほうごしよ

（三種財宝御書）

新版
1592
〜
1597

すしゅんてんのうごしよ　さんしゅざいほうごしよ

崇峻天皇御書（三種財宝御書）

けんじ　ねん　がつ　にち　さい　しじょうきんご

建治 3 年（'77） 9 月 11 日 56 歳 四条金吾

しろこそでいちりよう　ぜにいち　結　ときどの　おんふみ

白小袖一領・錢一ゆい、また富木殿の御文のみ。なによ

柿　梨　生　鹿尾菜　干　様　々　もの

りも、かき・なし・なまひじき・ひるひじき、ようようの物

受　と　品　々　おんつか　給　そうら

うけ取り、しなじな御使いにたび候いぬ。

かみ　おん　労　歎　い　そうろう

さては、なによりも上の御いたわりなげき入って候。

かみ　ごしんよう　そうら　殿　うち

たとい上は御信用なきように候えども、とのその内におわ

ごおん　陰　ほけきよう　養　たま

して、その御恩のかげにて法華経をやしないまいらせ給い

そうら　かみ　おんいの　そうろう　たいぼく　もと

候えば、ひとえに上の御祈りとぞなり候らん。大木の下

しようぼく

たいが

ほとり

くさ

まさ

あめ

当

の小木、大河の辺の草は、正しくその雨にあたらず、そ

みず

得

つゆ

伝

氣

得

榮

の水をえずといえども、露をつたえ、いきをえて、さかう

そうろう

あじやせおう

ほとけ

おん

ることに候。これもかくのごとし。阿闍世王は仏の御

敵

うち

ぎばだいじん

ほとけ

こころざし

かたきなれども、その内にありし耆婆大臣、仏に志あ

つね

くよう

くだいおう

き

み

りて常に供養ありしかば、その功大王に帰すところ見えて

そうろう

候え。

ぶつぼう

なか

ないくんげご

もう

おお

だいじ

しゅうろん

仏法の中に内薫外護と申す大いなる大事ありて宗論に

そうろう

ほけきよう

われ

ふか

なんだち

うやま

ねはんぎよう

て候。法華経には「我は深く汝等を敬う」、涅槃経には

いっさいしゅじよう

ぶつしようあ

めみようぼさつ

きしんろん

「一切衆生ことごとく仏性有り」、馬鳴菩薩の起信論には

しんによ ほう つね くんじゆう

ゆえ もうしんすなわ めつ

「真如の法、常に薰習するをもつての故に、妄心即ち滅し

ほっしんけんげん

みろくぼさつ

ゆがろん

み

隠

て、法身顕現す」、弥勒菩薩の瑜伽論には見えたり。かくれ

顕

とく

そうろう

たることのあらわれたる徳となり 候なり。

みうち

ひとびと

てんま付

さき

されば、御内の人々には天魔ついて、前よりこのことを知

との

ほうもん

くよう

障

こんど

つて、殿のこの法門を供養するをささえんがために今度の

だいもうご

つく

い

ごしんじんふか

じゅうらせつ

大妄語をば造り出だしたりしを、御信心深ければ十羅刹た

たてまつ

やまい

かみ

わ

すけ奉らんがためにこの病はおこれるか。上は我が

敵

思

いつ

旦

もう

もち

かたきとはおぼさねども、一たん、かれらが申すことを用い

たま

ご 所

労

だいじ

長

給いぬるによりて、御しよろうの大事になりてながしらせ

たも

かれ

はしら

侍

りゆうぞう

倒

わざん

給うか。彼らが柱とたのむ竜象すでにたおれぬ。和讒せ

ひと

やまい

冒

りようかん

いちじゆう

し人も、またその病におかされぬ。良観はまた一重の

たいか もの

だいじ

あ

だいじ

大科の者なれば、大事に値って大事をひきおこして、いか

そうら

只

そうら

にもなり候わんずらん。よもただは候わじ。

との

おんみ

危

おも

そうろう

これにつけても殿の御身もあぶなく思いまいらせ候ぞ。

いちじよう

敵

狙

たま

双

六

いし

ふた

一定かたきにねらわれさせ給いなん。すぐろくの石は二つ

なら

掛

くるま

わ

ふた

みち

傾

並びぬればかけられず、車の輪は二つあれば道にかたぶか

かたき

ふたり

もの

鬱

愠

そうろう

失

ず。敵も二人ある者をばいぶせがり候ぞ。いかにとがあ

おと

み

放

たも

りとも、弟どもしばらくも身をはなち給うな。

との いちじようはら悪 そう 顔 あらわ だいじ おも

殿は一定腹あしき相かおに頭れたり。いかに大事と思

はら もの てん まも たま し たま との

えども、腹あしき者をば天は守らせ給わぬと知らせ給え。殿

ひと 過 ほとけ 成 たも

の人にあやまたれておわさば、たとい仏にはなり給うとも、

かれ よろこ なげ もう くちお

彼らが悦びといい、これよりの歎きと申し、口惜しかるべ

かれ 励 いにしえ かみ ひ

し。彼らがいかにもせんとはげみつるに、古よりも上に引

っ そと 姿 静

き付けられまいらせておわすれば、外のすがたはしずまり

うち むね 燃

たるようにあれども、内の胸はもうるばかりにやあるらん。

つね かれ み いにしえ いえ 子 うやま

常には彼らに見えぬようにて、古よりも家のこを敬い、

公 達 参 たま かみ め

きゆうだちまいらせ給いておわさんには、上の召しありと

も、しばらくつつしむべし。

慎

にゆうどうどの

たま

か

ひとびと

惑

もの

入道殿いかにもならせ給わば彼の人々はまどい者にな

顧

もの

こころ

殿

るべきをばかえりみず、物おぼえぬ心に、とののいよいよ

きた

み

いちじよう

炎

むね

焚

息

逆

来るを見ては、一定ほのおを胸にたき、いきをさかさまに

吐

公

達

切

もの

にようぼう

かみ

つくらん。もしきゆうだち・きり者の女房たち「いかに上

ご所 労

と

もう

ひと

そうら

の御そろうは」と問い申されば、いかなる人にて候え、

ひざ

屈

て

あ

それがし

ちから

およ

ごしよろう

膝をかがめて、手を合わせ、「某が力の及ぶべき御所労に

そうら

そうらう

じたいもう

おお

そうら

は候わず候を、いかに辞退申せども、ただと仰せ候え

みうち

もの

そうらう

そうらう

鬢

ば、御内の者にて候あいだ、かくて候」とて、びんを

搔

直

垂

強

爽

こそで

いろ

もかかず、ひたたれこわからず、さわやかなる小袖、色あ

もの

着

念

ごらん

る物なんどもきずして、しばらくにようじて御覧あれ。

かえ

がえ

おんこころ得

うえ

まつだい

ほとけ

返す返す御心えの上なれども、末代のありさまを仏の

と

たま

そうろう

じよくせ

しょうにん

こ

たいか

説かせ給いて候には、「濁世には聖人も居しがたし、大火

なか

いし

堪

つい

の中の石のごとし。しばらくはこらうるようなれども、終に

焼

砕

はい

けんじん

ごじよう

くち

と

み

はやけくだけで灰となる。賢人も、五常は口に説いて身に

ふ

ま

み

そうろう

甲

ざ

さ

は振る舞いがたし」と見えて候ぞ。「この座をば去れ」

もう

ひと

との

つく

お

と申すぞかし。そこばくの人の殿を造り落とさんとしつる

落

早

勝

み

おんびん

つく

に、おとされずして、はやかちぬる身が、穩便ならずして造

お せけん もう 漕 漕 ふね 壊 じき
り落とされなば、世間に申すこぎこいでの船こぼれ、また食

のち ゆ な かみ 部屋 たま こ
の後に湯の無きがごとし。上よりへやを給わつて居してお

ところ なにごとな ひ 暮 あかつき
わせば、その処にては何事無くとも、日ぐれ・暁なんど、

い かえ さだ 狙 わ や つまど
入り返りなんどに定めてねらうらん。また我が家の妻戸の

わき じぶつどう いえ うち いたじき した てんじよう
脇、持仏堂、家の内の板敷の下か天井なんどをば、あなが

こころ 得 ふ ま たま こんど 前 かれ 謀
ちに心えて振る舞い給え。今度はさきよりも彼らはたばか

かしこ もう かまくら 荏 柄 よめぐ との
り賢かるらん。いかに申すとも、鎌倉のえがら夜廻りの殿

ばら 過 こころ 合 あ 語
原にはすぎじ。いかに心にあわぬこと有りとも、かたらい

たま
給え。

よしつね

へいけ

攻落

難

義経は、いかにも平家をばせめおとしがたかりしかども、

しげよし 語

へいけ

滅

たいしようどの

長田

おや

成良をかたらいて平家をほろぼし、大将殿は、おさだを親

敵

思

へいけ

お

くび

のかたきとおぼせしかども、平家を落とさざりしには頸を

き たま

しにん

とお

ほけきよう

切り給わず。いわんや、この四人は、遠くは法華経のゆえ、

ちか

にちれん

いのち

か

屋敷

かみ

め

近くは日蓮がゆえに、命を懸けたるやしきを上へ召された

にちれん

ほけきよう

しん

ひとびと

さきざき

ひとびと

り。日蓮と法華経とを信ずる人々をば、前々彼の人々いか

顧

たも

うえ

との

いえ

なることありともかえりみ給うべし。その上、殿の家へこ

ひとびとつね

通

敵

夜

い

合

怖

の人々常にかようならば、かたきはよる行きあわじとおじ

おや

敵

あらわ

おも

るべし。させる親のかたきならねば、顕れてとはよも思わ

隠

もの

ほど

つわもの

つね

睦

じ。かくれん者は、これ程の兵士はなきなり。常にむつば

たま

との

はらあ

ひと

もち

たま

せ給え。殿は腹悪しき人にて、よも用いさせ給わじ。もし

にちれん

いの

ちからおよ

さるならば、日蓮が祈りの力及びがたし。

りゆうぞう

との

あに

との

おん

悪

ひと

竜象と殿の兄とは、殿の御ためにはあしかりつる人ぞか

てん

おんはか

との

みこころ

し。天の御計らいに、殿の御心のごとくなるぞかし。いか

てん

みこころ

そむ

思

せんまん

たから

満

に天の御心に背かんとはおぼするぞ。たとい千万の財をみ

かみ

捨

たま

なん

せん

ちたりとも、上にすてられまいらせ給いては、何の詮かあ

かみ

親

おも

みず

るべき。すでに上にはおやのように思われまいらせ、水の

うつわ

したが

仔

牛

はは

おも

ろうしや

つえ

頼

器に随うがごとく、こうしの母を思い、老者の杖をたのむ

しゆ

殿

おぼ

ほけきよう

おん

助

がごとく、主のとのを思しめされたるは、法華經の御たすけ

羨

みうち

ひとびと

おも

にあらずや。「あらうらやましや」とこそ御内の人々は思わ

疾

しにん 語

にちれん

聞

たま

るるらめ。とくとくこの四人かたらいて、日蓮にきかせ給え。

ごうじよう

てん

もう

との

なきおんちち

おんはは

さるならば、強盛に天に申すべし。また殿の故御父・御母

おんこと

さえもののじよう

なげ

そうろう

てん

もう

の御事も「左衛門尉があまりに歎き候ぞ」と、天にも申し

い

そうろう

さだ

しゃかぶつ

みまえ

しさいそうろう

入れて候なり。定めて釈迦仏の御前に子細候らん。

かえ

がえ

いま

わす

くびき

とき

との

返す返す今に忘れぬことは、頸切られんとせし時、殿は

供

うま

くち

っ

泣

悲

たま

ともして馬の口に付いてなきかなしみ給いしをば、いかな

よ

わす

との

つみ

じごく

い

たま

る世にか忘れなん。たとい殿の罪ふかくして地獄に入り給

にちれん

ほとけ

成

しやかぶつ

拵

たも

わば、日蓮をいかに仏になれと釈迦仏こしらえさせ給うと

もち

そうろう

おな

じごく

にちれん

も、用いまいらせ候べからず。同じく地獄なるべし。日蓮

との

とも

じごく

い

しやかぶつ

ほけきよう

じごく

と殿と共に地獄に入るならば、釈迦仏・法華経も地獄にこ

やみ

つき

い

ゆ

みず

い

そおわしまさずらめ。暗に月の入るがごとく、湯に水を入る

こおり

ひ

焚

にちりん

暗

投

るがごとく、氷に火をたくがごとく、日輪にやみをなぐる

そうら

少

違

がごとくこそ候わんずれ。もしすこしもこのことをたがえ

たも

にちれん

恨

たも

させ給うならば、日蓮うらみさせ給うな。

せけん

えきびよう

殿

申

としかえ

この世間の疫病は、とののもうすがごとく、年帰りなば

かみ

覚

そうろう

じゅうらせつ

おんはか

いま

上へあがりぬとおぼえ候ぞ。十羅刹の御計らいか。今し

ばらく世^よにおわして物^{もの}を御覽^{ごらん}あれかし。

また、世間^{せけん}のすぎえぬようばし歎^{なげ}いて、人^{ひと}に聞^きかせ給^{たま}う

な。もしさるならば、賢人^{けんじん}にははずれたることなり。もし

さるならば、妻子^{さいし}があとにとどまりて、はじを云^いうとは思^{おも}わ

ねども、男^{なん}のわかれのおしさに、他人^{たにん}に向^むかつて我^わが夫^{おとこ}の

恥^恥はじをみなかたるなり。これひとえに、かれが失^{とが}にはあら

ず、我^わがふるまいのあしかりつる故^{ゆえ}なり。

人身^{じんしん}は受^うけがたし、爪^{つめ}の上^{うえ}の土^{つち}。人身^{じんしん}は持^{もち}ちがたし、草^{くさ}の

上^{うえ}の露^{つゆ}。百二十^{ひやくにじゅう}まで持^{もち}つて名^なをくたして死^しせんよりは、生^い

いちにち

な 上

たいせつ

なかつかさの

きて一日なりとも名をあげんことこそ大切なれ。「中務

さぶろうざえもんのじよう

しゅ おん

ぶつぼう おん

せけん

三郎左衛門尉は、主の御ためにも、仏法の御ためにも、世間

こころ 根

かまくら ひとびと うち

の心ねも、よかりけり、よかりけり」と、鎌倉の人々の口

謳

たま

くら たから

にうたわれ給え。あなかしこ、あなかしこ。蔵の財よりも

み たから 勝

み たから こころ たからだいいち

身の財すぐれたり、身の財より心の財第一なり。この

おんふみ ごらん

こころ たから 積 たも

御文を御覧あらんよりは、心の財をつませ給うべし。

だいいちひぞう ものがたり

か

にほんはじ

第一秘蔵の物語あり。書いてまいらせん。日本始まつて、

こくおうににん ひと こころ

たも

いちにん すしゅんてんのう

国王二人、人に殺され給う。その一人は崇峻天皇なり。こ

おう

きんめいてんのう

おんたいし

しょうとくたいし

おじ

にんのう

の王は、欽明天皇の御太子、聖徳太子の伯父なり。人王

だいさんじゆうさんだい　みかど

しようとくたいし　め　ちよくせん

第三十三代の皇にておわせしが、聖徳太子を召して勅宣

くだ　なんじ　しょうち　もの　き　ちん　そう

下さる。「汝は聖智の者と聞く。朕を相してまいらせよ」

うんぬん　たいしさんど　じたいもう　たま

と云々。太子三度まで辞退申させ給いしかども、しきりの

ちよくせん　や　うやま　そう　たま

勅宣なれば、止みがたくして敬つて相しまいらせ給う。

くん　ひと　ころ　たも　そう　おう　みけしき　変

「君は人に殺され給うべき相まします」と。王の御気色かわ

たま　しょうこ　しん

らせ給いて「なにという証拠をもつてこのことを信ずべき」。

たいしもう　たま　おんまなこ　あか　すじ　通　そうろう　ひと　怨

太子申させ給わく「御眼に赤き筋とおりに候。人にあだ

そう　こうてい　ちよくせん　かさ　くだ

まるる相なり」。皇帝、勅宣を重ねて下し「いかにしてか、

なん　のが　たいしい　まぬか　ごじよう

この難を脱れん」。太子云わく「免脱れがたし。ただし、五常

もう

兵

み

はな

たま

がい

のが

たま

と申すつわものあり。これを身に離し給わずば、害を脱れ給

ないてん

にんはらみつ

もう

わん。このつわものをば内典には忍波羅蜜と申して、

ろくはらみつ

いち

うんぬん

六波羅蜜のその一なり」と云々。

たも

たま

しばらくはこれを持ち給いておわせしが、ややもすれば

はら悪

おう

やぶ

たま

とき

ひと

い

こ

腹あしき王にて、これを破らせ給いき。ある時、人、猪の子

進

筭

抜

い

こ

まなこ

をまいらせたりしかば、こうがいをぬきて猪の子の眼をず

刺

たま

憎

おも

奴

斯

ぶずぶとささせ給いて、「いつか、にくしと思うやつをかく

おお

たいし

ざ

せん」と仰せありしかば、太子その座におわせしが、「あら

浅

くん

いちじようひと

怨

たま

あさましや、あさましや。君は一定人にあだまれ給いなん。

おんことば　み　がい　つるぎ　たいしおお　たから　と

この御言は身を害する剣なり」とて、太子多くの財を取

よ　おんまえ　ことば　き　もの　おん引　出もの

り寄せて御前にこの言を聞きし者に御ひきで物ありしか

ひと　そが　おとどうまこ　もう　ひと　かた　うまこ

ども、ある人、蘇我大臣馬子と申せし人に語りしかば、馬子、

わ　事　やまとのあやのあたいこま　あたいいわい　もう　もの　こ

我がことなりとて、東漢直駒、直磐井と申す者の子を

語　おう　がい　やま　おうい　み

かたらいて、王を害しまいらせつ。されば、王位の身なれ

おも　容　易　もう

ども、思うことをばたやすく申さぬぞ。

こうし　もう　けんじん　きゆうしいちげん　九　度　思

孔子と申せし賢人は、九思一言とて、ここたびおもい

いちども　しゅうこうたん　もう　ひと　ゆあみ　とき　さんどにぎ

て一度申す。周公旦と申せし人は、沐する時は三度握り、

じき　とき　さんど　吐　たま　聞　われ　うら

食する時は三度はき給いき。たしかにきこしめせ。我ばし恨

みさせ給うな。仏法と申すはこれにて候ぞ。

いちだい かんじん ほけきよう ほけきよう しゆぎよう かんじん ふきようほん

一代の肝心は法華経、法華経の修行の肝心は不輕品にて

そろう ふうきようぼさつ ひと うやま

候なり。不輕菩薩の人を敬いしは、いかなることぞ。

きようしゆしやくそん しゆつせ ほんかい ひと ふ ま そちら

教主釈尊の出世の本懷は人の振る舞いにて候いけるぞ。

あなかしこ、あなかしこ。賢かしこきを人にんと云い、はかな果無きを畜ちく

という。

けん じさんねんひのとうしくがつじゅういちにち

建治三年丁丑九月十一日

にちれん かおう

日蓮 花押

しじようさえものじようどのごへんじ

四条左衛門尉殿御返事